

定延 由紀（さだのぶ ゆき）



共訳書に『アーロン・T・ベック 認知療法の成立と展開』（創元社）、『聖書大百科』（創元社）、『戦闘技術の歴史 第3巻』（創元社）など。バベル古典新訳シリーズでは、『武士道』（新渡戸稲造/著）、『エリア随想』（チャールズ・ラム著）を監訳。

ラフカディオ・ハーンと聞いて、多くの方は「耳なし芳一」「雪女」「むじな」などの怪談を思い浮かべるのではないのでしょうか。けれどもハーンは、来日前からすでにジャーナリストとして活躍していました。日本へも、「ハーバース・マンズリー」誌の特派員としてやってきたのです。

ところが待遇上の不満から特派員を辞め、求職活動の末に、英語教師として松江に赴任しました。この一八八〇年の来日から、熊本の五高に赴任するため松江を去るまでの、二年足らずの日本の印象をまとめたものが、日本での第一作となる本書、『日本瞥見記』（*Glimpses of Unfamiliar Japan*）です。ハーンが数々の記事や著作により、世界に日本の伝統文化や風俗を紹介した功績は、高く評価されています。

本書、第一章 *My First Day in the Orient* からは、あこがれの国日本にたどりついた四〇歳間近のハーンの、少年のような心の高ぶりが伝わってきます。さらに日本最古の神社である出雲大社（杵築大社）に取材した *Kitzuki: The Most Ancient Shrine of Japan*、舞妓について語る *Of a Dancing Girl*、西洋人には不可解な日本人の微笑みを扱った *The Japanese Smile*、そして松江を離れる最終章 *Sayōnara!* ジャーナリストとしての確かな観察眼と、巧みで簡潔な文章が、ハーンの見た日本の魅力を生き生きと伝えています。

ハーンが目にしたのは、開国から二〇年以上が過ぎ、あこがれた古い日本の美が次第に消えつつある日本の姿でした。それを惜しみ、また日本という国を、人々を、文化を愛する気持ちが、この作品の底辺には流れています。ハーンの嘆いた日本の変わりようさえ遠い昔となりましたが、約一三〇年前の日本に、一緒にタイムトラベルしてみませんか。